

01 インドの地下鉄建設現場に安全を守る技術を導入

JICAの円借款を通じてインドの首都デリーで建設中の地下鉄デリー・メトロの工事現場に、発光ダイオード(LED)を利用した安全対策システム「On Site Visionization(OSV)」が導入されました。これは、現場の見える化、技術とも呼ばれており、地盤や構造物の計測データを継続して確認し、地盤のずれや構造物に変形が起きた時に察知した危険度を、光るセンサーがLEDの色で知らせる、いわば「危険度の信号機」です。安全時では青、危険度が増すにつれて緑、黄、赤と変化していきます。

この装置は、神戸大学の芥川真一教授を中心に開発が進められ、導入に当たっては、(株)オリエンタルコンサルタンツ、デリー交通公社が協力。日本でも、一部の道路や工事現場で利用されていますが、今回のデリー・メトロへの導入が世界最大規模となります。

工事現場での作業時の安全対策が十分でなかったインド。1997年に円借款事業が始まってからは、ヘルメットと安全靴の着用や、現場



デリー・メトロ建設現場に取り付けられたOSV。数カ所に分かれ光るセンサーが設置されている

の整理整頓を徹底するなど、安全への配慮を改善してきました。デリー交通公社の現場監督のティアギさんは、今回のOSV導入の効果を、「これまでデリー交通公社が行ってきた安全対策と異なり、日本の新しい技術を活用しているので、現場の作業員が高い意識を持ってくれている」と評価しています。

今後もこの経験を生かし、同じく地下鉄建設が進む、同国のバンガロール、コルカタ、チェンナイといった都市の作業現場にも、OSVを設置することが検討されています。

02 「土木学会国際貢献賞」を受賞

ミャンマー土木工学会会長のハン・ゾー氏が5月、「土木学会国際貢献賞」を受賞しました。この賞は、海外の土木工学の発展やインフラ整備に貢献した日本人、または日本の土木工学の発展や土木技術の国際交流に献身した外国人に贈られるもの。受賞を受けてハン・ゾー氏は、「思いがけないことだったが大変光栄。私だけでなく、私の国にとっても良い刺激となります」と喜びを語りました。

長年ミャンマー建設省に務めた同氏は、1980年にJICAの「橋梁技術訓練センタープロジェクト」の担当者として約10年にわたり橋梁整備にかかわって以来、国内全土でこれを推進。2本の長大橋建設では陣頭指揮をとりました。「橋梁技術訓練センター」は、当時のプロジェクト担当者が講師を務め、延べ100人以上の後進の指導に当たり



「橋の維持管理は、ミャンマーの技術だけでは限界があるので、日本の技術をもっと学びたい」と話すハン・ゾー氏

ました」とハン・ゾー氏。日本から学んだ技術は、その後国内のインフラ事業に活用。これまでに170以上の橋が建設されています。また、ハン・ゾー氏は現在も、日本のNGOや企業と協力し、技術交流を積極的に行っています。

今後については、「ミャンマーは、サイクロン被害などが原因で道路の状態が悪い。国内の交通アクセスを改善するため、またASEAN(東南アジア諸国連合)域内の回廊を整備していくためにも、道路網は非常に重要」と述べました。

03 「変わりゆくアフリカ―経済成長下の光と影、平和への展望―」開催

5月26日、JICA地球ひろば(東京・広尾)で、パネルトーク「変わりゆくアフリカ―経済成長下の光と影、平和への展望―」が開催されました。進行役にNHK解説員の道傳愛子さん、パネリストに毎日新聞社記者の白戸圭一さんと武内進一JICA研究所上席研究員を迎え、アフリカの現状と今後の展望について話し合いました。

アフリカ各国での豊富な取材経験を持つ白戸さんは、アフリカが石油や鉱物など豊富な資源により著しい経済成長を遂げる一方で、貧富

の差や武装勢力による暴力、治安悪化といった「負の部分」も生じていることを臨場感のある写真を通して紹介。また武内研究員は、汚職や紛争の原因として国家統治の弱さを指摘し、「国家の機能と社会への責任を正していくことが、国際社会やアフリカの人々にとつての課題」とコメント。道傳さんは、自身が取材した南部スーダンの元兵士の社会復帰の映像を紹介しながら、「20年以上も紛争が続いたので、若者は平和を知らない。まず、平和を取り戻すことから始めなければ」と述べました。